
にとひなクリスマス

ベッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
にとひなクリスマス

【NZコード】

N8074N

【作者名】
ベッシー

【あらすじ】

12月、にとりは魔理沙と共にとある研究を始めていた。一方雛は時々遊びに来るにとりが気になつていて……。

(前書き)

「ひとつ離が一緒に居るのが最初と最後だけの即席ですが、適当にお楽しみください。

木々は紅葉を終え、全ての葉を落とす冷たい風が吹いていた。未だ雪こそ降つていないので、曇り空の口には降つてもおかしくない……そんな寒さだった。――」、妖怪の山では自然が顯著にそれを表していた。

山の麓の河原付近で一人の少女がくるくると「何か」をしていた。一見不可解な行動をしているように見えるが、実はとても大切なことだつたりする。そんな事をしているところに別の少女がやつてきた。

「あつ、いたいた。厄神様、おつかれー」

声をかけた少女は河城^{かわしろ}にとり。この妖怪の山に住む河童の一人で、冬服仕様^{かわしろ}のか首周り袖周りが控え目にモコモコしていて、黒いタイツを履いているのが見える。手には小包みを持っていた。

「ん、ありがとう、にとり。……名前で呼んで良いつて言つたじゃない」

こちらは鍵山^{かぎやま}雛^{ひな}。先ほど呼ばれていたとおり厄を集める神様で、いつも一人で人間のために災厄を集めている。神様だからなのか理由は定かではないが、長袖である以外は外見に違いは見られない。

「そういえばそうだったね！ 雛と二人で話している時はなんとかしこまつちゃつて」

そういうながら頭の後ろを少しだく。そして思い出したかのようにな、

「あ、そう言えばこれ、差し入れ！ 良かつたら食べて」と、にとりは手にしていた小包みを半ば強引に雛に渡した。

「……中身はサンドイッチとか、じゃないわよね？」

「いや、普通のおにぎりだけど……サンドイッチの方が良かつた？」

「毒電……いや危電波をどこからか受け取ってしまった雛は、そ

んなことはないと必死で首を横に振る。そして有難くいただくな」と受け取り、

「……ねえ、休憩するからにとりも一緒に、食べない?」

「うひかしら、にとりの顔を覗き込むようにたずねると、

「うん、離がそう言つなら、是非!」

そうして一人河辺に腰を下ろして他愛のない話を始めたのだった。

近頃、にとりはとある魔法使いの研究の手伝いをしていた。魔法の知識・技術だけでは完成しないことで、機械の力を借りたいと言わされたからだ。もう何度も研究を重ねてだいぶそれらしくなつていた。だが、あと一歩と言つところでどうにも上手いかず、悪い意味でルーチンワークになりかけていて、そつぬつ時には雑談に花を咲かせることも多かつた。

「ところで、うひして24日までに完成させないといけないんだい？」

「ん、なんだにとり、『クリスマス』を知らないのか?」

「『クリスマス』……? どうかで聞いた気がするけど、何だっけ」

作業の手を休めることなく話を続ける。そして自慢げに、
「ああ、紅白の服のヤツが夜のうちにプレゼントを空を飛んで配る
んだ……つて早苗さなえが言つてたぜ」

この幻想郷に最近になって入ってきた新しいイベントは、大抵山の巫女から流れてくることが多い。

「紅白で空を飛ぶつて、靈夢?れいむ とてもじゃないけど他人にプレゼントを配るようには見えないけどねえ……」

「『外』には靈夢は居ないだろ。うひやひ『三田』つてやつがそうらしい」

伝聞では「うひうねじれ方をするといつ良い見本である。

「……さて、また調整を加えてみたけど、うひかな?」

にとりは魔法使い 霧雨 魔理沙に問いかける。

「んー…………いやダメだ。まださつきの方が強度があつたぜ」
そう言われてにとりは、こっち方面じゃないのかなあともう何度もになるか分からぬ微調整をし始めた。

「あーもうこれだけじゃ足りないのかあ？ 全くやれやれだぜ」
それからさらに十数回の微調整と実験を繰り返すも、依然として結果は芳しいものではなかつた。あと一歩と言つことが余計に彼女らを焦らせる。

「ちょっと一息入れたほうが良いかもなあ。なあにとり、 そなだろ？」

「んあ、 そなだね、 そなだ方が良いかも」

そう言つて二人は出掛けるのであつた。

「…………ちょっと待て。どうしてその流れで僕のところに来るんだ？」

そう疑問を抱くのは古道具屋「香霖堂」の店主、森近 霖之助である。

「靈夢のところは遠いしな…………」こななうに近いしつつさげるし

「それなら人里へ行つても同じだろ？…………？」

魔理沙とついでににとりはやれやれと言いたげな表情で、

「香霖も意地が悪いな。そんな気軽に人里なんか行けないぜ」

「ああ全くだよ。霖之助は半人だからまだしも、人里は人間ばつかだよ」

特に話を聞く氣はなかつた霖之助は黙つてお茶を淹れる。

「そうだ、香霖は『クリスマス』つて知つてるか？」

霖之助は魔理沙の口から飛び出した意外な単語に少し驚く。

「あ、ああ。僕も人並な知識は持ち合わせていいつもりだからね。それが外のことであつても同じ事さ。魔理沙はクリスマスについてどこまで知つてゐるんだい？ やれ、表面上しか知らないのだろう。キミの事だそれがすべてだと思っているに違ひない。そもそもクリスマスと言つのはかの有名なイエス・キリストの生誕祭のことで、

グレゴリオ暦の12月25日に行われるんだ。世間一般的にその前日をクリスマス・イヴなんて呼ぶが、これは間違いで、24日の夕方以降のことだけをイヴと呼ぶ。このイヴはイヴニングのイヴなんだ。何でそんなあいまいな時間帯を加えたかと言つと教会歴と呼ばれるものではイヴもクリスマスと同じとして考えていたからなんだ。ともかくクリスマスはあくまでキリストの生誕を祝うものでサンタクロースに直結させるのは少しおかしい。サンタクロースは司教ということであつながらがあるのだがまあこれは大したことじゃない。他にもクリスマスに関わることはいくつかあって、例えばクリスマスカラーなんでものがあるが、これは赤と緑そして白の三色を基本としているが、これはそれぞれ意味があつて、赤は愛を、緑は命を、白は純潔さを表している。そんなクリスマスは宗教行事と言う枠を超えて良くあるイベントとの一つになってしまったが、ここに信仰があるのだとしたら世界中の人が一斉に願つこの日に何かが起こつてもおかしくはない。そして 、

「まあそんなことはどうでもいいんだぜ。それはおまけでこっちが本題だ」

長々と話していた霖之助は、だつたら最初からそう言つてくれよと言いたいところだつたが、意味がないのでため息で答える。

「実はな、クリスマスまでに『被弾しない弾幕』を作りたいんだ」魔理沙とにとりは今までやつていた研究を霖之助に話した。もしかしたら彼が手助けになるかもしれないからだ。先ほどの話は本当に関係がない。

「ふむ……まつたくと言つていいほど無意味なことだが、そう言つことなら面白い。ん、待てよ。似たよつなものが外の世界にもあつたな」

そう言つと霖之助は店の奥の方へと何かを探しに行つてしまつた。ゴソゴソと言つう物音と、何かがなだれ落ちる音が聞こえた。

「り、霖之助、大丈夫かい？」

「ああ、大したことはない。それよりもこれがそうだ」

そう言つて手にする機械のスイッチを入れた。するとそこから映像が浮かび上がつた。ホログラムである。

「見ての通りこれは実体じゃない。ただこれを型にすればもしくは魔理沙とにとりは互いに顔を見合せて一つ頷いた。

「……つてことがあつてねえ。まだ最終調整が終わらないのさー」「ふうん、そうなの……」

休憩の口実だつたおにぎりが無くなつても話が続いていたために休憩は続いていたが、その話も終わつてしまつた。

「それでねー……おつと、そろそろ戻らないと。もつちよつとやることが残つてるんだ。ごめんね雛、また来ても良いかな?」

「ええ、構わないわ。私はずっとここにいるのだから」

「ごめんねー」繰り返しにとりは魔法の森の方面へと向かつて行つた。残された雛は一人、

「……にとりの、ばか」

そうつぶやくのだった。

それから数日、にとりは研究の合間にじょくじょく雛に会いに来ては魔理沙との研究の話をしていた。そして例の日に近づいてきた頃、問題が起きた。

いつものようににとりが雛に近況を話していると雛は急に立ち上がり、

「そんなに魔理沙と一緒に楽しいなら、ここになんて来なければいいじゃない! 私が一人だからってからかつてるんでしょ! もう、知らない!」

声を張り上げて山の奥深くへと行つてしまつた。

「えつ、ちょ、雛ー!？」

その声が彼女に届くことはなかつた。今すぐにでも追うこともできたのだが、飛び出して行つた理由が分からぬ以上見つけても何

もしてあげられない。仕方なくにとつは魔理沙の所へと向かい事の顛末を話した。

「ははあん、そりゃあことり、お前が悪いぜー。どうせ理由も分かつてないんだろ？　私の言つとおりにすれば万事おつけだぜ？」

「……魔理沙の言つことを信じりつて？　ま、まあ私には分からなければけど」

「だろー？　だつたら私に任せりつてー……そう言つながら何やら不穏な雰囲気を漂わせ始めた。……僅かながら心配である。

それから一人は急いで小型の箱を作り上げた。元々造りつとしていたものは完成していく、それとは別のものである。

「それ持つて、話をしていくんだ。そうしたらきっと、分かってもらえるぜ」

「うん、ありがとう魔理沙。……ちよつと行つてくるー。」

「……とつは妖怪の山へ向かつていつた。魔理沙はそれを見送つて、「よし、じやあ私も準備しなくつやあな。……ちよつと今日だしな」

「

「……雛、探したよ？」

「あ……こどり……ど、どうして？」

妖怪の山の奥、体育座りをしていた雛をことつまよつやく見つけた。

「……雛は『クリスマス』つて知つてる？」

言われるだろ？　と思つていていたいくつかの小言とは全く見当違いのことばがことりの口からこぼれてきたので、雛は戸惑つも何とか返事をする。

「えつ、あ、ま、前にこどりが話してくれたじゃない」

「うん、でね、今まで魔理沙とそれに関係することをしてたんだ」

ひとりの口から魔理沙、と言つ単語が出た瞬間、雛は少し顔をそ

むける。しかしこの人はそんな雛の顔を両手で押されてじつと見つめる。

「ねえ雛、雛の服って、クリスマスカラーだと、思わない？」

「くりすま……ああ、赤と緑と白って言つやつね、そう言われてみると、そんな気もするわね……。でもそれがどうじ、つ！」

雛が言葉を詰まらせたのには深い理由はない。とても簡単なことでわざわざ説明をするほどでもない。物理的に、言えなかつただけなのだから。

「……ふう、雛、これをね、雛に受け取つてもらいたいの」

にとりはそう言つとカバンの中から例の小箱を取り出した。更にその箱を開けて、中に入っていたモノを取り出した。

「魔理沙と作った『被弾しない弾幕』の試作品。触れるけど、被弾しない。無意味なことに全力を注いでみたんだ。魔法と科学と、未来で出来る」

その淡く輝く星型を、雛に手渡す。

「うんっ、これで完璧だ。メリークリスマス、雛！」

「……い、色々待つて！？ さつき、え、あれ！？」

にとりはそれで満足したのか雛から少し離れて空を見ていた。空気が澄んではいるがあいにくの曇天で、それならば雪が降ればいいのにと、そういう曖昧な天気であった。……不可解な位置を飛ぶ一本の流星が通るまでは。

「メリィー……クリスマース、だぜー！」

はきはきとした声が響き渡り、空には星屑が散りばめられた。それはこの妖怪の山からでも充分見えるほどだった。声はかろうじてだが。

「でもって、アレが本物。流石にこちまで飛んでこないと思つけど、それとほとんど同じものをばら撒いているんだ。綺麗でしょ？」

雛は手元と空を交互に見つづ、最後ににとりの顔を見て答える。

「うん……ありがとう、にとり……」

「もう、勝手にどつか行つたらやだよ？ 心配するし、それ……」

お互いに手を握り合いながら、手元の星の寿命が尽きたのか消えていくのを眺めて、空いた手を更に握つて今度は笑いあう。

『メリークリスマス！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8074z/>

にとひなクリスマス

2011年12月25日20時47分発行